



本日はよくお参り下さいました

彼岸が過ぎても、まだまだ蒸し暑い今日このごろ、いかがお過ごしでしょうか。9月9日に三浦半島と房総半島を直撃した台風15号は、天神社の境内にも爪痕を残していきました。境内の木が二本、根本から折れてしまい、台風が過ぎた早朝から、総代さんを始めとする有志の方々のご協力により、片付けることができました。また、9月28日には、正五九祭が氏子総代や役員参列のもと行われました。この日はお不動様の御開帳の日に当たり、普段なかなか見ることのできないお不動様のお姿を拝して頂くことができました。そして、いよいよ今月22日（火）には、即位礼が行なわれます。御代替わりにおいて行なわれる諸儀式は、皇室・国家を挙げた重義です。これらを通じて私たち国民は天皇陛下との結びつきを改めて実感できるのではないのでしょうか。新帝陛下の御即位を、こぞってお祝い致しましょう。今月も皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。権禰宜 道子



祝日には国旗を掲げましょう。

10月

1日・15日 月次祭(つきなみさい)

皇室の弥栄と国家安泰、氏子崇敬者並に社会の幸福と平和を祈る。

8日 寒露 (かんろ) 晩夏から初秋

にかけて野草に宿る冷たい露のことをさし、秋の深まりを思わせる。



14日 体育の日 オリンピック東京大会の開会式が行われた日を記念して定められた「スポーツにしたいしみ、健康な心身をつちかう」日。

17日 神嘗祭 (かんなめさい) 皇室の大祭でその年に収穫した新しい米で造った神酒と神饌とを伊勢神宮に奉る儀式。神嘗の「なめ」は、新嘗の「なめ」と同じで、「かみのあえ＝神の饗(あえ)」が変化した語であるといわれる。「饗えす(あえす)」は食べ物を調べてもてなす意の古語。

22日 即位礼 (そくいれい) 皇位につかれた天皇陛下が高御座(たかみくら)に登られ、国民や諸外国の代表がそれを寿ぐ儀式。当日は宮中の賢所(かしこどころ)に即位の旨をご報告される。

24日 霜降 (そうこう) 秋も末で、霜が降りる頃という意味。この頃になると秋のもの寂しい風趣が醸されてくる。

年祝い	年齢	由来	年祝い	年齢	由来
還暦 <small>かんれき</small>	61歳	十干十二支が60年で生まれた年に戻るため。	百寿 <small>ひゃくじゆ</small>	99歳	「百」から「一」を引くと「九十九」になることから。
古希 <small>こき</small>	70歳	杜甫の「人生七十、古来稀なり」という一節より。	百寿 <small>ひゃくじゆ</small>	100歳	文字通り、百歳になったお祝い。
喜寿 <small>きじゆ</small>	77歳	喜の草書体が、七十七と読めることから。	百一賀 <small>ひゃくいちが</small>	101歳	百歳以上は毎年「百二賀」・「百三賀」などとして祝う。
傘寿 <small>さんじゆ</small>	80歳	「傘」の略字が、八十に見えることから。	茶寿 <small>ちやじゆ</small>	108歳	茶の字を分解すると十が2つと八十八、足して108だから。
半寿 <small>はんじゆ</small>	81歳	「八十一」の字を合わせると「半」と読めるから。	珍寿 <small>ちんじゆ</small>	110歳	文字通り珍しいことから。
米寿 <small>まいじゆ</small>	88歳	米の字を分解すると、八十八になることから。	皇寿 <small>こうじゆ</small>	111歳	皇の字を分解すると白(99)と十二で、足して111だから。
卒寿 <small>そつじゆ</small>	90歳	卒の略字が九十に分解できることから。	大還暦 <small>だいかんれき</small>	120歳	2回目の還暦を迎えることから。

↑主な年祝い一覧表(諸説あり)

「長寿を祝う風習」
「年祝い」

私どもは、一生のうちには初宮詣、七五三、成人式、結婚式など多くの人生儀礼を行います。長寿を祝う風習として「年祝い」があります(表参照)。この風習は中国大陸から伝わり、平安時代には「算賀

天神さまの豆知識

(さんが)という儀式が行われるようになりました。江戸時代には、長寿を祝う風習が庶民の間に広まりました。長寿の祝いには、当人の健康と、息災を願うだけでなく、周囲の人々が、長寿の運を分けてもらいう意味もあります。ただ今の時代の感覚からすると、還暦は人生の終盤ではなく、むしろ大還暦に向けてのスタート地点と言えるような気が致します。参考文献『イチから知りたい! 神道の本』三橋健著 西東社発行

今月の言葉

『天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何をか思わむ』

淳仁天皇(じゆんにんてんのう)

奈良時代の天皇。舎人親王の子。

大地を照らす太陽や月の光に限りがないのは、すべての自然には神が宿っているからだ。神、つまり自然に反した生き方は、それ相應の災厄を招くだろう。神の御霊を拒絶するものは、自然や人間社会や他者、そして自分自身をも拒絶しているのと同じことだ。

参考文献『神道のことば』武光誠監修 河出書房新社発行